

『西方の人』考察(下)

河 泰 厚

五

『西方の人』一篇の核心概念が聖霊とマリアであることは前述のとおりであるが、この両概念から引き出される『西方の人』の主題とはやはり「クリスト」の一生の如何なるかである。それは「詩的正義」のために戦い続けた受難の生涯であり、芥川はこの「わたしのクリスト」の一生の姿を、周辺の人物や事柄を取り入れつつ、逆に浮き彫りにしようと試みた。

こうして描いてきたクリストの人生の意味を、芥川は『西方の人』のほぼ終わりの「36クリストの一生」に次のように記している。

クリストの一生ははじめだつた。が、彼の後に生まれた聖霊の子供たちの一生を象徴してゐた。(ゲエテさへも実はこの例に洩れない。)クリスト教は或は滅びるであらう。少くとも絶えず変化してゐる。けれどもクリストの一生はいつも我々を動かすであらう。それは天上から地上へ登る為⁰¹⁹に無残にも折れた梯子である。薄暗い空から叩きつける土砂降りの雨の中に傾いたまま。……(傍線筆者)

おそらくこの一節に、彼の描く、自身と重ねた受難者キリスト像

のすべては集約されていると言つてよいであらう。これを解くことは、また芥川文学そのものの本質を解くことともなる。また特に右の傍線の「天上から地上へ登る」という一節は、この解釈をめぐつて長い論争も続いてきた。

論争の発端となつたのは吉田精一氏のこの作品についての次のような評である。

—— こういうキリストの一生は、彼の後に生まれた聖霊の子供達の一生をも象徴している。それはみずから燃えつきようとする一本の蠟燭にそっくりである。或は又地上から天上へ登る為⁰¹⁹に無慚にも折れた梯子にたとえてもよい。薄暗い空から叩きつける土砂降りの雨の中に、傾いたまゝの梯子に⁰¹⁹

……(傍線筆者)

作品では「天上から地上へ登る」になつてゐるものが氏によつて「地上から天上へ登る」と変わつてしまつてゐる。笹淵友一氏も、

彼の一生は現世の向うにあるものを指し示そうと努力したものであつて、地上よりも天上によらうとして、無惨にも折れた梯子にもたとえられる⁰¹⁹

と、この一節を解釈した。

これを問題として論争を提起したのが佐藤泰正氏である。氏は「芥川龍之介管見―近代日本文学とキリスト教に関する一試論」(『国文学研究』 昭36・9)で、

それはまた、彼の目指すものが、「地上から天上へ」の脱出、超克の契機を含みつつ、同時にまた、「天上から地上へ」の、いわば還相の途上に完結せしめられねばならぬものであることを意味している。¹⁷⁾

と、「地上から天上へ登る」でなく、「天上から地上へ登る」と記されていることに注意を促しつつ、

「天上から地上へ登る」――一見、いかにも芥川的な、逆説的な機知を弄した比喩とも見える言葉のなかに、彼の歩みを圧する抵抗感と挫折の意識が、したたかに告白されている。¹⁸⁾

と、論じ、この一節に芥川文学全体を解く鍵を見出した。

これに対し、吉田精一氏は、「今のところ私は『地上から天上へ登るために』と解釈する方が妥当で、芥川の書きあやまりと見ているが、なお私にとっては今後の問題である」としており、「芥川龍之介の人と作品―『西方の人』を中心に」(『国文学』 昭41・12)では、

佐藤泰正氏が指摘してから問題になった「天上から地上へ登る為に無残にも折れた梯子」は、「改造」の初出にもこのままであり、もとの原稿にもこの通りである。(この句の解釈には日本近代文学館編「日本近代文学」の拙稿参照)私はこれをうっかり「地上から天上へ登る」とうけとり、佐藤氏から追求をう

けた。しかしこれもまた芥川のケアレス・ミステークでないかとの疑いは消えない。¹⁹⁾

と、佐藤泰正氏の主張を一部受容しながらもやはり疑義を呈した。

さらに、笹淵友一氏は佐藤泰正著『近代日本文学とキリスト教・試論』(基督教徒兄弟団 昭38)の書評の中で、この一節を文脈・文脈の上から、

この「地上へ登る」という逆説的表現のもつ意味合いも問題だが、まず確認の要があるのはこの一句の「西方の人」の中での安定性の問題だ。キリストも、マリアの子として下界の人生に懐かしさを感じないではなかったが、聖霊の子である「彼の道」は嫌でも応でも人気のない天に向つてゐる。「芥川のキリスト論はこの観点で貫かれている。著者もこの事実を無視したわけではなく、だから芥川に矛盾分裂があるという。だが矛盾があるとすればさきの一文との間においてだけで、それを措いては些かの曖昧さもない。²⁰⁾

と述べ、また思想・内容の上からも、

「天上から地上へ登る為に折れた梯子」はナンセンスと云うものだ。キリストとゲーテの一生を較べた芥川はキリストの中の地上への指向がもつと大きければ、ゲーテ同様に穩かな老年を迎ええたことを知っていた。マリア的、地上的指向に挫折などはない。そういう点からいっても辻褃の合わない文だ。²¹⁾

と、誤記説を主張した。

その後、佐藤泰正氏は『西方の人』論(『国語と国文学』 昭45・2)を書いて自説を深めるとともに、新たな次元での作品論を試み

た。氏はまず「宗教的正統論よりの批判を一応排し、この作の構造そのものに即して、その主題を洗いつくしてゆくこと」の必要を述べ、次に作品に内在する「宗教性」は、「生涯の起結の全文脈に於て問う」べきものとして、執筆時の観点を問題とした。例の「天上から地上へ」に関しての「梯子」の比喩は芥川の「深い聖書体験より発している」との説を呈示した。氏はこの論の中で、『旧約聖書』「創世記」第二十八章十節以下に見られるヤコブの夢を引き、これに『新約聖書』「ヨハネ伝」第一章五十一節以下のキリストの言葉を重ねて読む見方を呈示した。芥川のヤコブ物語への深い関心は、遺稿の「闇中問答」などにもうかがえるところで、ここにこの一節の根柢を置く氏の論は卓見である。結論的に氏は、

このキリストの言葉に、「地上から天上へ」の往相的契機を含みつつ、ついに「天上から地上へ」の還相の裡に成就される、真の宗教的内実が示されていることを、芥川もまた感じえていた筈だ。しかもなお、彼が敢て「無残にも折れた」「梯子」の比喩を語らんとした時、彼は「キリストの一生」に託しつつみずからの生と芸術の、かけがえのない挫折と敗残の情をそこに定着しえたかみえる。「地上へ登る」らんとするついに届きえざるその挫折の姿に、彼は万感の思いをたくした筈である。

と述べる。

一方、笹淵友一氏は「芥川龍之介とキリスト教——『西方の人』について——」（『国文学』 昭41・12）で、「そして『天上から地上へ登る』というの『地上から天上へ登る』の誤植か原稿の書き誤りと解した。現在では原稿そのものの誤りではなかったかと思っ

ている。」と、やはり誤記や誤植を強調する。氏はこの論文を大幅に加筆した『『西方の人』論』（『明治大正文学の分析』 明治書院昭45）で、「天上から地上へ登る」という一句は、『西方の人』の全文脈と矛盾する」として、佐藤泰正氏に対する詳細な反論を試みた。以後氏は「芥川龍之介『西方の人』新論」（『ノートルダム清心女子大学紀要』昭52・11）を著したが、これは『西方の人』にフロベールの芸術至上主義の影響をみるユニークな論であり、そこでもやはり誤記説が力説されている。それは、『西方の人』（菊地弘他編『芥川龍之介事典』 明治書院 昭60）においても繰り返されている。

筆者はこの「天上から地上へ」は「地上から天上へ」の誤記または誤植と解する。それはこの一文が全文脈から完全に孤立しているからである。さらに細部的にみれば「天上から地上へ」の「天上から」という視点は成り立ちえない。キリストは地上にあつて天国に情悦したのであり、その情悦は情悦にとどまつて、天国に入ることには逆にできなかったというのが芥川の認識である。したがって、「天上から」という起点は不可能である。次に「地上へ登る」の「登る」だが、物理的には当然「降る」とあるべきだろう。それを「登る」と書いたとすれば、地上への価値観によると見なければなるまい。だがキリストは「彼の天才の為に人生さへ笑つて投げ棄ててしまった」し、「炉辺の幸福」をも信じなかった。したがって「天上」より「地上」を高く評価したという仮定は成立しない。第三に「地上へ登る」ことが挫折につながったということである。地上への指向が平穩な人生を約束することはゲーテ論によつても明らかであり、

それが悲劇を結果するという論理は成り立ちえない。このようにこの一文そのものが論理的に成立困難であるばかりでなく、それに先行する「けれどもクリストの一生はいつも我々を動かすであらう。」という一句との関連においても、その存在権は否定されなければならない。「クリストの一生はいつも我々を動かすであらう。」という文章は、「勿論クリストの一生はあらゆる天才の一生のやうに情熱に燃えた一生である。彼は母のマリアよりも父の聖霊の支配を受けてゐた。彼の十字架の上の悲劇は実にそこに存してゐる。」という一節を承けてゐる。したがつて何の予盾感もなしに、「天上から地上へ」という一文をこれに続けるということは、到底考えがたい。

笹淵友一氏の論は右の三つに論点をしぼることができ、本文に則したまことに論理的な分析である。氏は一貫してこの誤記説を主張している。

以上が昭和十七年、吉田精一氏が『西方の人』の一節を解釈し、さらに佐藤泰正氏がこれに対し問題提起をして以来、半世紀にわたつての吉田精一・笹淵友一両氏と佐藤泰正氏との間に行われた、いわゆる△天上から地上へ▽をめぐる論争である。以来、他の論者も加わつて、論は芥川全作品の命脈を制するものとして、論議が続けられてきた。しかし、これをまとめれば、笹淵友一氏と佐藤泰正氏の論に収斂されることとなり、この論議は今もまだ決着はついていない。

六

笹淵友一氏が「天上から地上へ」が△地上から天上へ▽の誤記であることを『西方の人』の全文脈を検討して論証するところはまことに論理的で、首肯しなければならぬところである。しかし、氏の論の問題点の一つは、「クリスト」を「聖霊の子供」のみとして把握しているところではないであらうか。「マリアは唯の女人だつた。が、或夜聖霊に感じて忽ちクリストを生み落した」(2マリア)という一節に従えば、「クリスト」は聖霊を父とし、マリアを母とする、言わば「永遠に超えんとするもの」と「永遠に守らんとするもの」のはざまに引き裂かれるものとして描かれている。△神の子▽であると同時に「人の子」でもある。「人の子」という呼称はキリスト教では本来△マリアの子▽という意味ではなく、メシヤの別称で使われるが、芥川は「人の子」を△マリアの子▽、すなわち、△人間の子▽という意味にとらえたようである。

また、「12悪魔」の中で、キリストが悪魔の誘惑を受けるところがある。キリストは「第一にパンを斥けた」。それから「彼自身の力の特めと云ふ悪魔の理想主義者の忠告を斥けた」。最後に「世界の国々とその栄華と」を斥けた」と、芥川は「マタイ伝」第四章七、八節に則しながら解釈を施している。さらに、続いて「悪魔は畢にクリストの前に頭を垂れるより外はなかつた。けれども彼のマリアと云ふ女人の子供であることは忘れなかつた。」(傍線筆者)と記している。この一節は聖書にはない芥川の解釈であるが、ここで芥川は「クリスト」を「人の子」、すなわち、△マリアの子▽、△人間の子▽として見ていることは確かである。そうして、「永遠に守ら

んとするもの」とはまた、「現実的欲望」や「あらゆる地上の夢」を意味するとも見ることが出来る。このように仔細にみれば、「クリスト」が「聖霊の子供」、すなわち「永遠に超えんとするもの」であると同時に、また「マリアの子」として、「永遠に守らんとするもの」であることで、言わばこの両者に引き裂かれるものとしてあることを芥川は見逃してはいない。この点にふれて佐藤泰正氏は、たしかにクリストにふれて「ボヘミアン」「ロマン主義者」「詩的正義の為に戦ひつづけた者」「いつも未来を夢みてゐた超阿呆」など——「超えんとする」ものの宿命を示す言葉が多く語られてはいるが、しかもなお「守らんとするもの」への共感の重さもまた見逃しうるものではあるまい。²⁰⁸

と述べる。

「クリスト」の「永遠に守らんとするもの」である「マリアの子」、すなわち、「人の子」としての一面は「25天に近い山の上の間答」の中にもよく現れている。「彼のモオゼやエリヤと会つたのは彼の或精神的危機に仔んでゐた証拠である。(中略)しかし彼の投げつけた問は『我等は如何に生くべき乎』である。』というところの「精神的危機」とは何を指すのであろうか。「クリスト」の生き方が「永遠に超えんとする」一筋のものであつたならば、「十字架にかかる」ことのいささかの葛藤もなかつたはずである。しかし「如何に生くべき乎」を「彼の前に生まれたクリストたち」に尋ねたところに「天上」と「地上」のはざまに立つものの苦悩と、運命への深い反問の姿が描きとられる。

また、「28イエルサレム」では、その苦悩はさらに深く刻み出さ

れる。

ゲツセマネの橄欖はゴルゴタの十字架よりも悲壮である。クリストは死力を揮ひながら、そこに彼自身とも、——彼自身の中の聖霊とも戦はうとした。ゴルゴタの十字架は彼の上に次第に影を落さうとしてゐる。(中略)

「わが父よ、若し出来るものならば、この杯をわたしからお離し下さい。けれども仕かたはないと仰有るならば、どうか御心のままになすつて下さい。」

さらにまた、「32ゴルゴタ」では、

十字架の上のクリストは畢に「人の子」に外ならなかつた。

「わが神、わが神、どうしてわたしをお捨てなさる？」(中略)

「エリ、エリ、ラマサバクタニ」は事実上クリストの悲鳴に過ぎない。しかしクリストはこの悲鳴の為に一層我々に近づいたのである。

と言う。「人の子」としての「クリスト」の苦悩は、ここで極まるように見え、聖書の釈義を超えて、芥川は自身に「近づ」く、わが「クリスト」を描きとろうとする。すでに「聖霊の子供」にして、また「人の子」である「クリスト」の姿は疑う余地もない。

さて、芥川が遺稿として残した作品は『続西方の人』以外に『歯車』、『闇中間答』、『或阿呆の一生』、『或旧友へ送る手記』、『十本の針』などがあるが、これらの遺稿が芥川にとつては絶筆ともいへべきものであり、そのすべてが、正統『西方の人』の主旨を側面より照射するものとして注目される。

『或旧友へ送る手記』の「付記」に次のような一節がある。

僕はエムベドクラスの伝を読み、みずから神としたい欲望の如何に古いものかを感じた。僕の手記は意識してゐる限り、みずから神としないものである。いや、みずから大凡下の一人としてゐるものである。君はあの菩提樹の下に「エトナのエムベドクラス」を論じ合つた二十年前を覚えてゐるであらう。僕はあの時代にはみづから神にしたい一人だつた。

二十年前であるならば、府立三中時代、若き知識人の卵ともいえる芥川は「みずから神にしたい」と願つたことがあり、それは「西方の人」の表現を借りれば、まさに八地上から天上へ登 \checkmark ろうとした姿を思い起こさせる。そうして、やがて作家としての登場以後も彼は理知的、技巧的な翼を広げて芸術の世界に高く飛翔しようとして続けた。これは前述の図で言えばZ点からE点を経てA点、すなわち、天上の頂点に向かつて走りつづけた一生を暗示するものでもある。しかし、彼が三十五歳にして人生の総決算をしなければならぬ時点になつた今は、自身を「みずから大凡下の一人としてゐる」と言う。それは「西方の人」の表現を借りれば、まさに「天上から地上へ登る」とこととなり、図で言えば、A点からE点を経てZ点に向かつて走る、遠心力の対極としての、求心力への帰着とも言える。前者が「聖霊の子供」としての天才指向とすれば、後者はハマリヤの子 \checkmark としての現実指向ともいうべきである。死を目前にした芥川にとつての必然とはZ点からA点に登ることではなく、A点からZ点に向かつて登りつめてゆくことであつた。「無残にも折れた梯子」とはほかならぬA—Zの線を指すのもである。しかも「登る」とは、その試みのきびしさそのものを指すものである。

『西方の人』考察(下)

『或阿呆の一生』の「十九 人工の翼」には、『或旧友へ送る手記』と似た一節がある。

彼はこの人工の翼をひろげ、易やすと空へ舞ひ上つた。同時に又理智の光を浴びた人生の歎びや悲しみは彼の目の下へ沈んで行つた。彼は見すばらしい町々の上へ反語や微笑を落しながら、遮るもののない空中をまつ直に太陽へ登つて行つた。丁度かう云ふ人工の翼を太陽の光りに焼かれた為にとつとう海へ落ちて死んだ昔の希臘人も忘れたやうに。……

これは芥川自身の生涯を、またその宿命を最も比喩的に語つた一節とも見える。「人工の翼」を広げ、「易やすと空へ舞ひ上がつた」と言う。彼はその若年よりの龐大な読書量や知識からくみ取つた素材をもつて、数々の作品を生み出してきた。しかしその余りにも理知的、技巧的といわれる作風は八人工の翼 \checkmark そのものではなかつたか。いまその「理知の光を浴び」、「人生の」、現実の喜びや悲しみを眼下に見下ろしつづ、紡ぎ出してきた作品の数々とは何であつたか。この「人工の翼」をめぐる痛恨の思いはまた遺稿「菌車」の後半でも繰り返し語られる。それが今にして「易やすと」と語られたところに、彼が今選びとつた「天上から地上へ登る」道のけわしさが問われている。

また『十本の針』の「一 或人々」で芥川は、

唯直覚する人々はそれ等の人々よりも幸福である。真面目と呼ばれる美德の一つはそれ等の人々(直覚すると共に解剖する)には与へられない。それ等の人々はそれ等の人々の一生を恐しい遊戯の中に用ひ尽すのである。あらゆる幸福はそれ等の人々

には解剖する為に減少し、同時に又あらゆる苦痛も解剖する為に増加するであらう。「生まれざりしならば」と云ふ言葉は正にそれ等の人々に當つてゐる。

と記しているが、この「或人々」とはまたほかならぬ芥川自身を指すに違いない。晩年の彼自身の生に対する悔恨がここにもまた滲む。「解剖」という、理智をもって人生を分析しようとした彼は、「人工の翼」を広げて太陽に近づこうとした希臘人と異なるものではない。「人工の翼」で空へ舞い上がった時、彼の目に見えたのは「見すばらしい町々」であつた。いまその上に落とした「反語や微笑」とは何であつたか。いま己れの作家としての営みをまるごと問い返そうとすれば、彼の眼はこの「見すばらしい」現実そのものに向けられるほかはない。しかもその道が「易やす」と舞い上がるべき道ではなく、けわしくきびしい道であるとすれば、「天上から地上へ登る」とは安易な逆説ならぬ、彼の心身に食い入る真率なる告白そのものとみるべきである。

さらに、芥川のもう一つの遺稿『闇中間答』もまた、正統『西方の人』理解の補助線の役割を持つ重要な作品である。すでに芥川は『西方の人』で、「ヤコブの天使と組み合つたのも恐らくはかう云ふ決闘だつたであらう」（12悪魔）と、クリストと悪魔の対決をヤコブと天使の対決にたとえたことがあるが、これは芥川がかなりヤコブ物語に関心を持つてゐることを示唆し、『闇中間答』を書くもとになつたことも暗示している。すなわち作中の「或声」は「お前は何ものだ？」と問われ、「俺は世界の夜明けにヤコブと力を争つた天使だ」と答える。

『闇中間答』は闇の中でこの「或声」と「僕」が対峙する対話が軸となつてゐる。この「或声」は「僕」に向かつて、「お前はお前のエゴを忘れてゐる。お前の個性を尊重し、俗悪な民衆を軽蔑しろ。」「お前は超人だと確信しろ。」「お前は善悪を蹂躪してしまへ。」とけしかける。すなわち、「地上」的なもの、「マリア」的なものへの叛逆である。「僕」はこれに抗して、「しかし民衆を軽蔑しない」「大いなる民衆は滅びない。」「僕は超人ではない。」「僕は今後もしやが上にも善人にならうと思つてゐる。」と言ひ、その挑発には応じない。

続いて、「お前の来る所に平和はない。」と言ひ、「誰が来いと云ふものか！ 僕は群小作家の一人だ。又群小作家の一人になりたいと思つてゐるものだ。平和はその外に得られるものではない。しかしペンを持つてゐる時にはお前の倅になるかも知れない。」と、「僕」は「或声」に向かつて叫ぶ。やがて闇からの「或声」は去り、あの終末の悲痛な咳きが記されている。

僕（一人になる。）芥川龍之介！ 芥川龍之介、お前の根をしつかりおろせ。お前は風に吹かれてゐる葦だ。空模様はいつ何時変わるかも知れない。唯しつかり踏んばつてゐる。それはお前自身の為だ。同時に又お前の子供たちの為だ。うぬ惚れるな。同時に卑屈にもなるな。これからお前はやり直すのだ。

これは「守らんとするもの」の悲痛な叫びであり、また芥川自身の在り方への自己規定でもある。「お前の根をしつかりとおろせ。」「唯しつかり踏んばつてゐる。」という時、それは「天上」ならぬ「地上」においてであり、「地上」指向への促しでもある。佐藤泰正氏

は『西方の人』と『闇中間答』の二作品の関連性と指向点について、

この「西方の人」「闇中間答」の遺稿二作をつらぬく芥川の理解を、いまかりにいささか図式化してみれば、ヤコブ、キリスト、「僕」（『闇中間答』の主人公）に対して——ヤコブに挑む天使、キリストを誘なう悪魔、「僕」を使喚する闇よりの八声▽という対応にならう。かくしてここでは、「永遠に超えんとするもの」——聖霊の子たるキリストは、まさに守らんとするもの、ヤコブ、あるいは「闇中間答」における主人公と同列的存在となる。⁷⁰⁾

と述べているが、この指摘は、『西方の人』の「天上から地上へ登る」が八地上から天上へ登る▽でないことの一つの傍証でもあり、同時に芥川の指向点が「永遠に超えんとするもの」ではなく、「永遠に守らんとするもの」であったことを、聖書、『闇中間答』に照らし合わせて検討した的確な解釈として認めるべきである。

七

芥川は『続西方の人』の最終章に、象徴的な意味を持つ「22貧しい人たちに」という小見出しをつけて、生涯の最後を飾るこの作品を閉じている。さらにその最後は次のような言葉をもって終わっている。

しかし彼のジャアナリズムはいつも無花果のやうに甘みを持つている。彼は実にイスラエルの民の生んだ、古今に珍しいジャアナリストだった。同時に又我々人間の生んだ、古今に珍らしい天才だった。「予言者」は彼以後には流行してゐない。しか

『西方の人』考察(下)

し彼の一生はいつも我々を動かすであらう。彼は十字架にかか
る為に——ジャアナリズム至上主義を推し立てる為にあら
ゆるものを犠牲にした。ゲエテは婉曲にキリストに対する彼の軽
蔑を示してゐる。丁度後代のキリストたちの多少はゲエテを嫉
妬してゐるやうに。——我々はエママの旅びとたちのやうに
我々の心を燃え上らせるキリストを求めずにはゐられないので
あらう。(傍線筆者)

最後の一節は「ルカ伝」第二十四章十三節から三十二節にある記
事——イエス処刑のあと二人の弟子がエマオという村に行く途中、
不思議な旅人が寄り添い、イエスについて説き明かす。やがて日も
暮れ、招かれるままに彼ら弟子のつどう宿に入ったが、その旅人は
自身が復活のキリストであったことを示す。「かれら互いに言ふ『途
にて我らと語り、我らに聖書を説明し給へるとき、我らの心、内に
燃えしならずや』」(三三)——をふまえたものである。

このエマオのキリストについては、すでに芥川は自分の文学的出
発期に当たって武者小路実篤の登場がいかに大きな刺激となつたか
を、「久しく自然主義の淤泥にまみれて、本来の面目を失してゐた
人道が、あのエママのキリストの如く『日戻きて暮に及』んだ文壇
に再姿を現した時、如何に我々は氏と共に、『われらが心熱し』事
を感じたらう。」(『あの頃の自分の事』)と語っている。いま再びこ
の「エママのキリスト」に触れて言わんとするところは明らかであ
る。

またすでに死を前にしてのこの言葉に何が託されていたかもまた
明白である。佐藤泰正氏のいう「それはひとりキリストのみならぬ、

己れをひそかに『クリストたち』のひとりに擬する作者の根源なる渴望²³であり、これを受け止めた彼の最愛の弟子の堀辰雄は『エマオの旅びと』で、

彼が去つてから、はじめてそれに気がつき、それまで何気なく聞いてゐた彼の一言一言が私たちの心を燃え上らせる。

いま、「西方の人」の言葉の一つ一つが私の心に迫るのも、一度それに似てゐる。

と、切実に語っている。

またもう一人、太宰治は最後の評論『如是我聞』で、新たな文学の出現を渴望しつつ、この自身の過激な発言は、言わば「反キリスト的なものへの戦ひ」であるとし、芥川の苦悩を知らずして、何の文学かと激しく問いかけ、その苦悩とは、

日陰者の苦悶。／弱さ。／聖書。／生活の恐怖。／敗者の祈り。であることを挙げてゐる。

こうして芥川の最後の言葉は太宰治や堀辰雄というすぐれた昭和期の文学者たちに受け継がれてゆくことになる。芥川の死を以て大正文学は終わり、またその死を以て昭和文学が始まるとは、しばじは指摘されるところであるが、しかしこの転換期の作家としての芥川の意義を論ずるにあたって、その文学の機軸をつらぬくキリスト教とのかわりを除外しては、ついにその本質の何たるかを論じることが出来ない。

注

- (15) 吉田精一 『芥川龍之介』(三省堂 昭17)
- (16) 笹淵友一 『「西方の人」解説』(角川文庫 昭33)
- (17) 佐藤泰正 『芥川龍之介管見—近代日本文学とキリスト教に関する一試論—』(『国文学研究』 昭36・9)
- (18) (17)と同じ
- (19) 吉田精一 『日本の近代文学』(読売新聞社 昭39)
- (20) 吉田精一 『芥川龍之介の人と作品—「西方の人」を中心に—』(『国文学』 昭41・12)
- (21) 笹淵友一 『書評 佐藤泰正「近代日本文学とキリスト教・試論」』(『国文学研究』 昭39・3)
- (22) (21)と同じ
- (23) 佐藤泰正 『「西方の人」論』(『国語と国文学』 昭45・2)
- (24) 笹淵友一 『芥川龍之介とキリスト教—「西方の人」について—』(『国文学』 昭41・12)
- (25) (2)と同じ
- (26) 佐藤泰正 『炉辺の幸福—「西方の人」および「闇中間答」を中心に—』(『国文学』 昭50・2)
- (27) (26)と同じ
- (28) 佐藤泰正 『テキスト評釈「西方の人」』(『続西方の人』)』(『国文学』 昭33・7)